



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

復活節第4主日B年(2021年4月25日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：使徒言行録 4章8－12節

第二朗読：使徒ヨハネの手紙一 3章1－2節

福音朗読：ヨハネによる福音 10章11－18節

テーマ：命を捨てる、命を再び受ける

三つの朗読から

第一朗読の「あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリストの名によるものです」(10節)に注目してください。「名」はその人そのものを指します。イエスさまの名のもとに行う様々なわざは、ペトロが復活したイエスさまとの深い関わり合いのなかで行っているものです。

第二朗読の「御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています」(2節)は、わたしたちの本質を伝えます。神の子の未来の姿は、御子キリストと似た者、キリストとの同形化です。それは、すでに洗礼で始まり、日々の生活を通じてよりはっきりとしていきます。しかし、まだ完全には神の子ではありません。わたしたちの人生は神の子となる途上にあるのです。

福音にある「心にかける」(ギリシア語：メレイ)は印象的です。羊を「心にかける」牧者であるイエスさまは、父からの掟に従って、羊のために命を捨てます。同じように、神の子とさせていただいたわたしたちもまた、自分自身の「命を捨てる」ようにと招かれているのです。

説教

今日の福音はご存知の通り、イエスさまが、ご自分は「良い羊飼ひ」であると宣言する箇所です。羊飼ひが、羊たちを緑の青草へと導くように、わたしたちも「良い羊飼ひ」であるイエスさまに導かれて生きていくのです。

イエスさまは、当時の人々に親しみやすかった羊飼いのイメージを使って、たとえを語っています。このイメージはわたしたちにとって親しみやすいものでしょう。

教会が親しんできた「良い羊飼い」の伝統がある一方で、今日の福音を少していねいに読むと、大切なメッセージを見いだすことができるかもしれません。短い朗読箇所にもかかわらず「命を捨てる」という表現が四回も登場します。ギリシア語の直訳では「命を置く」となります。ですから、今日の福音のいわば隠れたテーマはイエスさまの死についてです。そして、中心となる箇所は「だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分で捨てる」(18節)となります。フランシスコ会訳の方が少し分かりやすいかもしれません。「だれもわたしから命を奪いはしない。わたしが自分から捨てる」。

イエスさまが自分から「命を捨てる」ことができるのは、「命を捨てる」ことを通じて、命を「再び受ける」ようになるためです。そのことは、天のお父さまが望んでおられた掟なのです。自ら「命を捨てる」イエスさまは、必ず天のお父さまによって命を「再び受ける」ことを知っておられました。というのも、自分の「命を捨てる」からこそ、天のお父さまはイエスさまを愛してくださるからです。

いささか複雑な解説になりました。単純にまとめると、天の御父から愛されていたことを知っていたイエスさまは、自ら進んで「命を捨てます」。なぜなら、天の御父から命を「再び受ける」こともよく知っていたからです。15節にある「知る」は、イエスさまと天の御父との深い交わりの関係をよく表しているのです。ですから、イエスさまは恐れず、ためらわずに「命を捨て」ていくのです。必ず復活させてもらえると知っているからです。しかしこれは、独りよがり命を捨てるのとは違います。

ところで、16節にある「囲いに入っていないほかの羊」とはユダヤ人以外の異邦人を指します。異邦人もまた、羊飼いであるイエスさまに導かれて、「声を聞き分け」、「一つの群れに」なります。どちらもギリシア語は未来形です。そうしますと、イエスさまが「命を捨てて」、「再び[命を]受ける」という復活の出来事の後に、異邦人が群れに迎えられるようになるのです。イエスさまの復活は、イエスさまご自身のためではなく、新しく群れに迎えられる異邦人のためだったのです。

